



一貫コース通信

自己肯定感と大学入試(大学入試から学べる事から)

ひと月前になるが教育改革に伴う高校と大学との接続改革2年目の『大学入学共通テスト』が実施された。採点結果は改革初年度とは随分と異なり、共通テストの理念に近づいた平均点になった印象を持った。言うまでもないが、共通テストの眼目は高校までに身に着いた学力を測る事にある。原則的(追試を除く)に全国津々浦々、同時刻に同一問題を一齐に受験するのだが、テスト後に予備校等の集計を踏まえ受験生はそれぞれの出願校を決める。

一方では、高校生のOECD主催の意識調査に因ると、日本の高校生の“自己肯定感”はかなり低率に在り、自分の力が社会に及ぼす影響力も肯定的ではないのだと言う。つまり、“自分がやらなくても、誰かがやるから”…とか、“どうせやったって、効果など期待できない”と消極的に捉えているのだそう。この現状を文科省もプロブレムと捉えている。思うに、他人に依存するのは楽だが、自分の責任や主体性の事を考えると何とも心もとない。

ところで“自己肯定感”とはなんだろうか？ 私には“如何にも大袈裟に聞こえる”感じがするが、煎じ詰めれば“自信”ではないだろうか。何れにしても、自己の存在に対し一定の価値を付すモノで、かつ、第三者に因る何某(なにがし)かの評価がないと自信を持つ事は難しい。では、どうしたら自信を持てるのかを考えると、まずは自分以外のヒトに認めて貰える事が重要だと考える。例えば、世の中に在る…選挙に於いて当選するとか、何かのコンペティションで優勝するとか、作品が上位入賞するとかである。しかし、大多数のヒトに取ってはこのような機会を得る事は簡単ではない。ましてや私の様に取り柄の無い人間なら尚の事だ。実のところ、私も、例に漏れず10代中期まで全く自信など持てなかった。その転機は、大学受験の時に訪れた。勿論、この間の勉強量は経験上最大であり、精神的不安の値もマックスで在ったと思う。しかも、不安に苛まれ努力をしたからと言って合格出来る訳では無いので、合格して初めて努力が報われたと実感出来たのである。周囲から観れば些細な事かも知れないが、命がけで取り組んだからか、合格は涙が漏れるほど嬉しかった。言うに及ばず、合格は大学から認められた事を意味する。従って“自信”に繋がったのは紛れもない事実である。また、この自己満足は、すぐさま周囲とも共有できるのが、大学合格の醍醐味なのだと思う。同時に、支えてくれた人の視線は私に対する期待とも想え、これからもしっかきやらねば…との、正の連鎖を作ってくれたと今更ながら思うのだ。振り返れば、これで東京行きが叶い、ヒトとしても視野が大きく広がったのである。

誰にでも自分も努力次第でより高みを目指せるかも…、と思える瞬間は在ると思う。しかし、“自信”を持って、突き進む事はそう簡単ではない。何故なら、自己肯定感⇌自信を得るにはそれに見合う努力と結果の下支えが不可欠だからだ。そして、そうした努力の有無は必ず周囲に伝わるものだ。ヒトは見かけに因らず、案外正直だからネ！

